

# ホーソン児童向け作品 『ワンダー・ブック』の対象年齢

—「黄金に変える手」を中心に—

熊田 岐子

## はじめに

19世紀アメリカ・ルネッサンス期の作家、ナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne) は、1850年に『緋文字』(*The Scarlet Letter*) を、続く51年『七破風の屋敷』(*The House of the Seven Gables*) を出版した。そして、同じく51年に児童向け作品『少年少女のためのワンダー・ブック』(*A Wonder Book for Girls and Boys*) の執筆に取りかかった。この『ワンダー・ブック』は古典神話を基として創作された作品であり、「ゴルゴーン的首」(“The Gorgon’s Head”)、「黄金に変える手」(“The Golden Touch”)、「こどもたちの天国」(“The Paradise of Children”)、「三つの金のリンゴ」(“The Three Golden Apples”)、「不思議な水差し」(“The Miraculous Pitcher”)、「キマイラ」(“The Chimæra”) の6つの物語が、序 (Introductory) と物語のあと (After the Story) が付け加えられて展開していく。ホーソンの最も成功した児童文学として知られている『ワンダー・ブック』の序文に、ホーソンはこう書き記している。

In performing this pleasant task—for it has been really a task fit for hot weather, and one of the most agreeable, of a literary kind, which he ever undertook—the Author has not always thought it necessary to write downward, in order to meet the comprehension of children. He has generally suffered the theme to soar, whenever such was its tendency, and

when he himself was buoyant enough to follow without an effort. (4; underlines mine)

ホーソーン的一般読者向け作品における文体は難解だと言われているが、子供向けに「調子を下げても常に考えているわけではなかった」というホーソーンの影響に注目し、どの程度彼は子供向けを意識し、あるいは意識をしなかったかを具体的な数字として確認しながら探していきたい。

## 1. 『ワンダー・ブック』に登場する聞き手の子供たち

### 1.1 ホーソーンによる子供たちの年齢設定

まず、ホーソーン自身が設定した聞き手（読み手）となる子供たちの年齢を明確にしよう。先に述べたとおり、『ワンダー・ブック』は、それぞれの物語に序と話し終えた後の様子が付いており、ユースタス・ブライト (Eustace Bright) という若者が、神話を基とした物語を聞かせるという形式がとられている。このユースタス・ブライトは、18歳であり、ウィリアムズ大学に通う学生であるとホーソーンは設定しているが、その紹介の中でおおよそその子供たちの年齢がわかるようになっている。

He [Eustace Bright] was a student at Williams College, and had reached, I think, at this period, the venerable age of eighteen years; so that he felt quite like a grandfather towards Periwinkle, Dandelion, Huckleberry, Squash Blossom, Milkweed, and the rest, who were only half or a third as venerable as he. (7; underlines mine)

ここに出てくるペリウィンクル (Periwinkle)、ダンデライオン (Dandelion)、ハックルベリー (Huckleberry)、スカッシュ・ブロッサム (Squash Blossom)、ミルクウィード (Milkweed) はホーソーンが実際の名前はここではそぐわないと考えて、彼の好みでつけた子供たちの名前である。注目すべきは、彼らの年齢がユースタス・ブライトの半分か3分の1となっている点である。ということは、単純に計算すると6

歳から9歳くらいの子供たちに語り聞かせている設定であると解釈できるのだ。他に、スウィート・ファー (Sweet Fern)、ブルー・アイ (Blue Eye)、クローヴァー (Clover)、プランタン (Plantain)、バターカップ (Buttercup) などの子供の名前が登場するが、上記の子供たちと同様の遊びをしているこの子供たちは、彼らと同年代であろうことは容易に推測できよう。

また、子供たちの具体的な年齢が示されている箇所もある。「ゴルゴーンの首」の序章には、「12歳の利口な少女プリムローズ」“Primrose, who was a bright girl of twelve” (8)、「6歳の子供カウスリップ」“Cowslip, a child of six years old” (8) とある。さらに、「黄金に変える手」の後の話には、「10歳の少女ペリウィンクル」“Periwinkle, a girl of ten” (59) とあるが、ペリウィンクルは先のユースタス・ブライトの半分くらいの年齢の子供たちに含まれている。よって、この時点では、6歳から12歳へと年齢の範囲が広がる。

各序を追うと、季節が巡っていくことも興味深い。「ゴルゴーンの首」は紅葉の秋、「黄金に変える手」は秋が深まる10月、「こどもたちの天国」はクリスマス、「三つの金のリング」は吹雪の翌日、「不思議な水差し」はさわやかな5月、「キマイラ」は「不思議な水差し」と同じ日となっている。子供たちはというと、「ゴルゴーンの首」で12歳であったプリムローズは、「三つの金のリング」では13歳になっている。

“Hear him, Periwinkle, trying to talk like a grown man!” said Primrose.  
“And he seems to forget that I am now thirteen years old, and may sit up almost as late as I please....”(87)

したがって、およそ6歳から12、13歳がホーソーンが設定した対象年齢であるが、少々幅が広いように感じられる。この年頃は読み書きを習っている最中であり、学力においては差があるため、無難な設定であると言えるだろう。

## 1.2 その子供たちの様子

各物語の序には、ユースタス・ブライトと子供たちの交流が描かれているため、その様子も参照したい。

表1 各物語の序におけるユースタス・ブライトと子供たちの交流

序章名	ユースタス・ブライトと子供たちの交流
タングルウッドのポーチ —「ゴルゴーンの首」の序	タングルウッドのお屋敷の玄関で、ユースタス・ブライトと子供たちが取り囲み話している。
シャドー・ブルック —「黄金に変える手」の序	シャドー・ブルックという小川にユースタス・ブライトと子供たちは集っている。ここで、昼食をとり、そのあとに物語が語られる。
タングルウッド遊戯室 —「こどもたちの天国」の序	吹雪の日に子供たちは雪で十分に遊んだあと、タングルウッドの遊戯室へ戻ってくる。ユースタス・ブライトはカウスリップを膝に乗せて話を始める。
タングルウッドの暖炉 —「三つの金のリンゴ」の序	吹雪の翌日、ユースタス・ブライトと子供たちは真っ白な雪の中へ飛び込んでいく。子供たちは穴を掘ったり、ユースタス・ブライトに雪を投げつけたりする。その日の夜に、タングルウッドの暖炉で話が始まる。
丘の中腹 —「不思議な水差し」の序	ユースタス・ブライトと子供たちの一行は、ある丘に登っている。しかし、小さな子供たちは登ることができないので、丘の中腹に残していくことになった。その彼らのご機嫌を取るために、リンゴを与え、楽しい話を彼らに聞かせる。
ボールド・サミット —「キマイラ」の序	ユースタス・ブライトと丘に登れる大きな子供たちは、丘の頂上に辿りつく。そこに積み上げられた石の上に腰をおろして、話が始まる。

以上のように、家の中でも楽しみを見つけ、そして喜々として自然と戯れる子供たちが描かれている。さらに、どういった子供たちなのかを知るために、「タングルウッド遊戯室—物語のあと」を見たい。

“Ah,” said the child, “you are making fun of me, Cousin Eustace! I know there is not trouble enough in the world to fill such a great box as that. As for the snow-storm, it is no trouble at all, but a pleasure; so it could not have been in the box.”

“Hear the child!” cried Primrose, with an air of superiority. “How little he knows about the troubles of this world! Poor fellow! He will be wiser when he has seen as much of life as I have.” (82-3)

これは、スイート・ファーンが、パンドラの箱の大きさをユースタス・ブライトに尋ねた場面である。「長さ3フィート…幅2フィート、それから高さ2フィート半」“three feet long ... two feet wide, and two feet and a half high” (82) という箱にいっぱいになるほど嫌なことが世の中にあるはずないと信じるスイート・ファーンに対して、プリムローズは世間を知っている大人のような発言をしている。この後には、「そう言うと、彼女は縄跳びを始めた。」“So saying, she began to skip the rope.” (83) と続く。物知り顔のプリムローズの遊びは縄跳びなのである。なんとも微笑ましい場面なのだが、ここでは物語について自分の意見を述べている子供たちの姿が見られる点に注目したい。ユースタス・ブライトが意見を導いているようにも思えるのだが、子供たちは誰が何と思うかなどは気にせず、無邪気に疑問をぶつけ、意見を述べるのだ。受け身ではなく、積極的に物語を楽しむ子供たちがここにいる。ホーソーンが聞き手として設定したのは、こういった子供たちなのである。

## 2. 『ワンダー・ブック』の英文難易度

先に触れたように、ホーソーンは子供向けだからといって「調子を下げて書こうと常に考えているわけではなかった」と述べているが、実際のところ、『ワンダー・ブック』という子供向け作品はどの程度の英語で書かれているのだろうか。ここでは、『ワンダー・ブック』と一般読者向けとされる作品の英文難易度を比較し、どの程度の違いがあるのか、それとも違いはないのかを数値で示しながら検討してみたい。

その方法としては、第一にFlesch Reading Ease (以下FRE) とFlesch-Kincaid

Grade Level (以下FKGL)<sup>1</sup>を用い、第二にJACET8000分析プログラム(以下v8an)を利用した語彙指数により、難度レベルの指数化を試みる<sup>2</sup>。FREとFKGLはMS Wordを使って簡易に測定できるものであり、リーダビリティを測るための機能である。また、v8anは語彙の頻度を測定する機能を持つが、ここでは語彙レベルを測るために使用する。

そこで、この検討のため、数多くあるホーソーンの一般読者向け作品からどの作品を取り上げるかが問題となってくるが、ここでは『ワンダー・ブック』の「黄金に変える手」と一般読者向け作品『七破風の屋敷』にはテーマの関連性があるとする先行研究に着目してみたい。

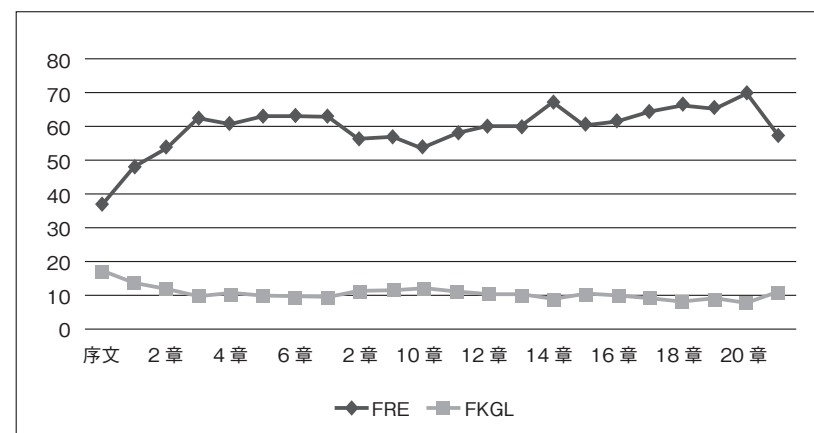
Perhaps, the tale is even a reminder of how evil endures, the subject that Hawthorne had just explored in *The House of the Seven Gables* (1851), his novel about the repercussions of individual crimes of greed upon subsequent generations. (Brown 82)

ブラウンの言う「強欲という個人的な罪が後に続く世代に与える影響」というテーマの関連性と、1851年に出版された『七破風の屋敷』と1851年に着手された『ワンダー・ブック』の執筆時期を考慮し、一般読者向け作品としては『七破風の屋敷』を選び、子供向け『ワンダー・ブック』からは「黄金に変える手」を対象作品としてみたい。

## 2.1 「黄金に変える手」と『七破風の屋敷』のFREとFKGL

FREは数値が低いほど高度な文章であることを示し、FKGLはアメリカの学校において何年生なら理解できるかを示している。『七破風の屋敷』は長編であり、総語数において「黄金に変える手」と著しく異なっているため、まず各章ごとのリーダビリティを計測することにした<sup>3</sup>。図1が『七破風の屋敷』の章ごとに測定した結果であるが、FREは37から67.4であり、FKGLは約7年生から16年生のレベルである。序文と第1章を除くと、FREはほぼ50~70の範囲内に収まり、FKGLもほぼ10年生の周辺に落ち着いていることがわかる。

図1 『七破風の屋敷』各章のFREとFKGL



『七破風の屋敷』全編にわたるFREは60.7、FKGLは9.8であり各章ごとに示した図1のグラフが示す数値とほぼ一致している。それに対して「黄金に変える手」(総語数5864語)のFREは70.6、FKGLは7.9である(表2)。

表2 『七破風の屋敷』と「黄金に変える手」のFREとFKGL

	『七破風の屋敷』	「黄金に変える手」
FRE	60.7	70.6
FKGL	9.8	7.9

理解しやすい指標であるFKGLで見ると、『七破風の屋敷』はおおよそ高校1年生レベル、「黄金に変える手」はおおよそ中学2年生レベルで、約2歳の年齢差が生まれている。つまり、「黄金に変える手」のほうが読みやすさの指標でいえば易しめに書かれており、ホーソーンがまったく一般向けの作品と同じ筆致で描いたものではないということが読み取れるわけである。

## 2.2 「黄金に変える手」と『七破風の屋敷』の語彙レベル

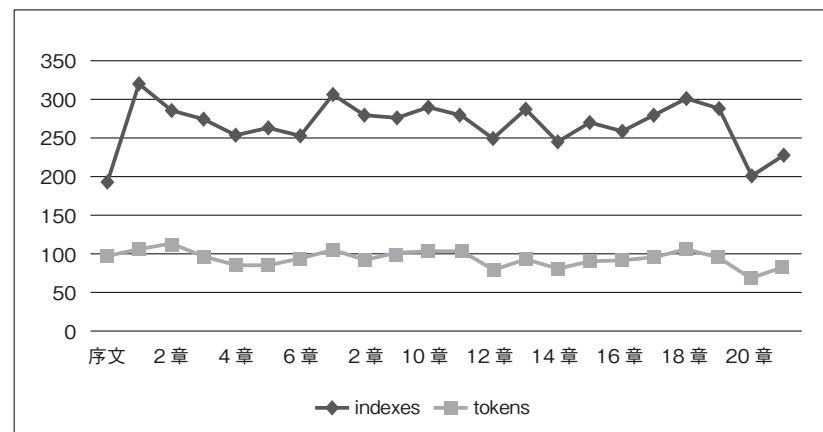
次に、「黄金に変える手」と『七破風の屋敷』の語彙レベルを知るために、v8anを利用して英文の語彙指数を計測してみたい。

表3 「黄金に変える手」(総語数5864語)の語彙指数

indexes (見出し語)	243.561
tokens (総語数)	69.626

先のリーダビリティ指標と同様、ここでも『七破風の屋敷』を章ごとに、indexesとtokensの語彙指数を出してみる。図2はそのグラフであるが、tokensの語彙指数は20章を除き100周辺を指し、大きな変動は見られない。しかし、indexesが200から340と範囲にばらつきがみられる。これは、indexesが総語数の違いに大きく影響を受けるためである。

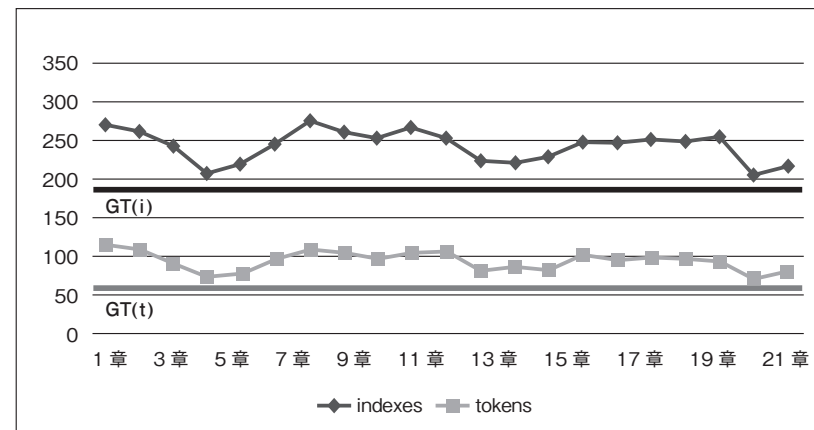
図2 『七破風の屋敷』各章の語彙指数



よって、総語数による指数の影響を排除するために『七破風の屋敷』のなかでも最小語数となる20章(総語数約2900語)に合わせ、『七破風の屋敷』のすべての章と「黄

金に変える手」を冒頭から約2900語で計算し直してみた(図3)。ただし、序文は892語と極端に少ないため、図3では抜いてある。

図3 『七破風の屋敷』と「黄金に変える手」各章冒頭約2900語の語彙指数



「黄金に変える手」を冒頭2900語から計算すると、indexes語彙指数は197であり、tokens語彙指数は67.077である。図3に直線で示したが、indexes、tokensともに『七破風の家』の折れ線グラフの最下部でさえ接しない数値となっている(indexesの最下部は20章201.701であり、tokensでは20章69.157である)。つまり、語彙の面でも、「黄金に変える手」は『七破風の屋敷』よりも明らかに難易度は低く、ホーソーンが一般向けの作品とまったく同じ筆致で描いたものではないということが理解できるのである。

ただ、筆者は、あくまでも『七破風の屋敷』と比べた場合、ホーソーンが意識的であるにしろ、無意識であるにしろ、「黄金に変える手」は子供向けに書かれていると述べているのであって、「黄金に変える手」の語彙指数約70は現在でいえばニュース誌Timeのレベルであるため、決して易しいレベルの英文とは言えないのである。そこで、次に他の子供向け作品と比較しながら、もう少し「黄金に変える手」の難易度を探ってみたい。

## 2.3 「黄金に変える手」と他作家の児童文学との比較

2.1、および2.2の検証の結果、『七破風の屋敷』と「黄金に変える手」は文章面においても、語彙の面においても、難度が異なることがわかった。しかし、第1章でも述べたような6歳くらいの子供が対象として含まれる作品としては「黄金に変える手」はやや難度が高いと思われる。ここではホーソーン作品だけではなく、他作家の児童向け作品を指数化し、その難易度の比較検討を行ってみたい。

題材としては『ワンダー・ブック』の子供たちとほぼ同年齢の子供たちが登場するマーク・トウェイン (Mark Twain) の『ハックルベリー・フィンの冒険』(*The Adventures of Huckleberry Finn*) を扱ってみよう。先の分析と同様に条件を整えるため、「黄金に変える手」と同じ語数(約5800)を作品の冒頭から抽出し、リーダビリティと語彙指数を計測する。

表4 「黄金に変える手」、『ハック・フィン』のFREとFKGL

	「黄金に変える手」	『ハック・フィン』
FRE	70.6	88
FKGL	7.9	4.8

表5 「黄金に変える手」、『ハック・フィン』の語彙指数

	「黄金に変える手」	『ハック・フィン』
indexes	243.561	206.387
tokens	69.626	47.777

FKGLでは『ハック・フィン』が小学校5年生程度となり、「黄金に変える手」の中学2年生程度とは相当の隔りがある。また、語彙の面でも20ポイント以上の差があることから、『ハック・フィン』と比べると「黄金に変える手」が子供向けとはいえ、決して小学生レベルを相手に書かれたものではないことが明らかである。つまり、「調子を下げようとして常に考えているわけではなかった」というホーソーン言葉が、数値の面からも裏打ちされたと言えるのである。

## おわりに

子供向けに「調子を下げようとして常に考えているわけではなかった」と述べながら、ホーソーンは一般読者向け作品よりも簡易な文章を「黄金に変える手」の中で用いた。しかしながら、その一方では完全に子供向けとは言えない英文であったことも明らかになったわけである。もちろん『ワンダー・ブック』すべてを取り上げたわけではなく、その周辺も含めて今後も検証を続けていかなければならない。

『ワンダー・ブック』は、ホーソーンが神話に創作を加えても、その神話の本質は変わらないだろうとして書いた作品である。彼が自在に変化させたこの作品があまりにも子供向けの語調となり、自分の想像力から離れていくのを嫌ったとも考えられるだろう。

最後にホーソーンは子供たちの想像力に信頼をおいて、序文を終わらせている。

Children possess an unestimated sensibility to whatever is deep or high, in imagination or feeling, so long as it is simple, likewise. It is only the artificial and the complex that bewilders them.(4)

小さな子供でも彼の思い描くような『ワンダー・ブック』のカウスリップやスイート・ファーンのような子供たちならば、想像力を発揮し、物語を楽しんでくれるだろうというホーソーン期待が感じられるのである。

## 註

- \* 本文中の『ワンダー・ブック』からの引用は、*The Centenary Edition* Vol.7からの抜粋とし、そのページ数を引用文の括弧内に示した。
- \* FREとFKGLおよびv8an使用のために、『七破風の屋敷』および『ハックルベリー・フィンの冒険』は、The Literature Network (<http://www.online-literature.com/>) のテキストを利用した。また、「黄金に変える手」は、Eldritch Press (<http://ibiblio.org/eldritch/>) から利用し、誤植は筆者が訂正した。
- \* ホーソーン作品名および登場人物名は、高尾直知識『ナサニエル・ホーソーン事典』(雄松堂出版、2006年)を使用させていただいた。

- 1 Flesch Reading EaseとFlesch-Kincaid Grade Levelの説明と算出法が、マイクロソフトのホームページで説明されている。  
 「読みやすさのスコアについて」  
 (「文書の読みやすさをテストする」から  
<http://office.microsoft.com/ja-jp/outlook/HP101485061041.aspx>)  
 読みやすさのテストは、1単語あたりの平均音節数や1文あたりの平均単語数を基準にしています。  
 [Flesch Reading Ease] テスト  
 最高ポイントを100として読みやすさを評価します。スコアが高いほど読みやすい文章といえます。標準的な文書の場合は、60～70を目標とします。  
 [Flesch Reading Ease] のスコアを算出するための計算式は次のとおりです。  

$$206.835 - (1.015 \times ASL) - (84.6 \times ASW)$$
 それぞれの値の意味は次のとおりです。  
 ASL = 文章の平均の長さ (文章数で割って得られた単語数)  
 ASW = 1単語あたりの平均音節数 (単語数で割って得られた音節数)  
 [Flesch-Kincaid Grade Level] テスト  
 このテストは、米国の学校の学年を基準にしています。たとえば、スコアが8.0の場合は、8年生であれば文書を理解できることを意味します。ほとんどの文書では、約7.0～8.0を目標とします。  
 [Flesch-Kincaid Grade Level] のスコアを算出するための計算式は次のとおりです。  

$$(.39 \times ASL) + (11.8 \times ASW) - 15.59$$
 それぞれの値の意味は次のとおりです。  
 ASL = 文章の平均の長さ (文章数で割って得られた単語数)  
 ASW = 1単語あたりの平均音節数 (単語数で割って得られた音節数)
- 2 JACET8000分析プログラム (v8an) を利用した語彙指数は、岡崎弘信「e-ラーニングを利用したリーディング用教材の定量化に関する試論」『英語英文学研究第62集』(創価大学英文学会、2008年3月)を基に算出した。
- 3 リーダビリティとは、文章の難易度のほか、フォントサイズやデザイン、紙質などのいわゆる視認性 (legibility) を含む場合もあるが、ここでは文章の難易度だけに焦点を絞って論じる。

#### 引用・参考文献

- Brown, Gillian. "Hawthorne and Children in the Nineteenth Century: Daughters, Flowers, Stories." *A Historical Guide to Nathaniel Hawthorne*. Ed. Larry J. Reynolds. NY: Oxford UP, 2001. 79-108.
- Hawthorne, Nathaniel. *A Wonder Book and Tanglewood Tales*. Columbus: Ohio State UP, 1972. Vol.7 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Eds. William Charvat et al. 23 vols. To date. 1962-.
- . *The Letters: 1813-1843*. Vol. 15 of *The Centenary Edition*. Eds. Thomas Woodson et al. Columbus: Ohio State UP, 1984.
- 村田希巳子 「ホーソーと児童文学—古典神話再話の分析とその時代性—」『ホーソーの軌跡—

生誕200年記念論集—』開文社出版 2005年 45-58。  
 ロバート・L・ゲイル 『ナサニエル・ホーソー事典』高尾直知訳 雄松堂出版 2006年 704-708。